

研究プロジェクト【「地域貢献」と「学生支援」が融合した新しい形の合唱ワークショップの創出】の実践と検証

—コーラスワークショップでのアンケートをもとに—

Practice and Verification of a Research Endeavor:

The Creation of a New Chorus Workshop Linking “Regional Contribution” and  
“Student Support”

—Based on Questionnaires Completed in the Chorus Workshop—

上野正人

Masato UENO

芸術系教育講座（音楽）

Division of Music and Arts, Department of Music

（平成 18 年 12 月 22 日受理）

（December 22, 2006）

**KEY WORDS**

地域貢献 Regional Contribution    学生支援 Student Support  
社会教育 Social Education        生涯学習 Lifelong Study  
合唱 Chorus

**要 旨**

本論は、平成 17 年 5 月 8 日上越教育大学で行われた、久比岐野合唱連盟、新潟県合唱連盟、本学音楽分野及び実技教育研究指導センター（音楽分野）の共催による「コーラスワークショップ」での研究プロジェクト【「地域貢献」と「学生支援」が融合した新しい形の合唱ワークショップの創出】の実践の成果を、開催までの運営方法やアンケート結果、実践内容をもとに分析・検証し考察したものである。本コーラスワークショップ開催のきっかけとなった地域合唱連盟の大学への働き掛けや 300 人を超える全県から集まった受講者のニーズの高さと熱意からは、現在の日本が抱える文化および行政も含めた大都市一極集中型という社会の弊害が見えてくる。これに因る社会教育の一つとしての生涯教育の機会の地域格差を是正し、地域社会の「知」的「動」的活性化のためには、「知」の核としての大学と地域との協働が不可欠であり、また地域社会がそうした活動を期待していることが本研究により明らかとなった。また同時に、今回のコーラスワークショップのような地域と大学が互いの持つ人的、物的財産を相互に出し合って行う活動が、地域における大学の存在意義を確実なものにするための重要な要素の一つであることも実感としても明らかとなった。今後の課題として、本研究プロジェクトの重要な課題の一つである「学生支援」をどのようにワークショップの中に盛り込んでいくか、そして、いかにしてこのような活動を継続させるかが挙げられる。

## 1 研究の目的と概要

### 1.1 本ワークショップ開催のきっかけと目的

合唱は、気軽に誰でも行うことができる音楽ジャンルの一つとして、広く普及している。全日本合唱コンクールなどを主催する社団法人全日本合唱連盟（以降、全日本合唱連盟と表記）に加盟する団体は平成18年1月現在5,156団体に上る（田辺、2006、p.44）。未加盟団体数を含めるとおそらくはこの倍以上の団体が存在すると推測される。そのような背景には、合唱が学校教育における音楽科授業の中でも積極的に取り上げられる重要な種目であると同時に、先述した理由から生涯教育として有効性が広く認められているからであろう。このような合唱活動のさらなる普及を目的として、全日本合唱連盟は全国を巡回する形で年に一度、全国規模のコーラスワークショップを開催している。新潟県でも、平成12年5月3日から5日までの3日間、新潟市芸術文化会館で行われた。その内容は全日本合唱連盟所属の指導者を中心とした講師陣がそれぞれの専門の分科会を持ち講習を行うという形であり、年ごとに内容の差はあるが総じてバラエティに富んだ内容となっている。しかし、この開催方法は、年に一度全国を巡回するという事からも分かるように、各受講者が継続してこの講座を受講する事が地理的にも時間的にも困難であるという側面を持っている。実際に新潟市で開催されたときに、上越から参加した団体からもそのような声が聞かれた。そのような声の中から、上越地域でもこのようなレベルの講習会を毎年開催できないかという意見が寄せられた。その理由には、先述した理由の他に、県庁所在地など都市部での開催なのでたとえ巡回してきても地方の県庁所在地以外の都市の愛好者は受講が難しいこと、また自分たちの普段の活動の中で、自分たちが満足できる十分な指導を行える指導者に恵まれていないと感じている事が挙げられた。そうした意見が寄せられる背景には、現在の日本が抱える大きな問題の一つである文化活動を含むあらゆる場面での都市部一極集中型の弊害が存在すると考えた。そのような意見や状況をふまえて、上越地区で活動するアマチュア合唱団が多く加盟する久比岐野合唱連盟と上越教育大学で連携してできる方法はないかということで話し合いが持たれ、本コーラスワークショップの開催となった。この開催にあたり、大学主催による公開講座のような大学が一方向的に地域に貢献しようというのではなく、共に持ちうる物的、人的資源を出しあい共同で行うという形を目指し、またその会において大学と地域社会が学生に実践研究の場を提供しうる形にする事を目的とするために、表題にある研究プロジェクトを立ち上げた。

### 1.2 研究プロジェクトの概要

#### 1.2.1 本研究プロジェクトの目的と方法

本研究プロジェクトの目的は、「地域貢献」と「学生支援」が融合した新しい形の合唱ワークショップの創出にある。

本研究の特色として、次のような点が上げられる。その一つは、これまでのような大学からの一方通行的な支援・貢献ではなく、外部の予算・人的財産の取り込みと大学の人的・知的・物質的財産の提供による互いの財産の相互・共同利用により、地域活性化のための企画を共同で運営するという点。もう一つは、同時にこうした地域との連携した活動の中で、社会教育活動の実践研究の場として学生に場を提供するという新しい「地域貢献」「学生支援」の形を創出する点にある。

本研究は、「知の集団・核」としての大学という組織が、どのように地域社会活動の活性化に寄与できるか、そして教育大学として、それがどのように教師を目指す本学学生の育成に寄与できるかという、地域を生かした「地域貢献」、「学生支援」のあり方を問う新しい総合的とも言えるべき社会教育実践活動の創出につながるという意味において大きな意義があると考えられる。

本研究の方法として、各地で行われているコーラスワークショップに関する資料の収集とその分析、地域合唱連盟との連携による参加希望者のニーズの調査・分析を行う。そしてそれら調査結果の分析をもとに、地域合唱連盟代表者、学生と協議を行い、その内容を踏まえながらより良いコーラスワークショップのあり方を追求する。また、そのすべての過程を記録し、検証を行う。

#### 1.2.2 期待される成果

このように地域における大学のあり方、教育の府としての大学のあり方を地域との連携による活動のなかで研究し実践することは、生涯学習としての地域活動の活性化に大いに貢献することにつながる同時に、学生に新しい実践研究の場を提供することにもつながる。またこのような地域との連携は、これから地域における大学の存在意義の確立に大きな意味をもたらすと同時に、文化活動の大都市集中型からの転換への大学の寄与という新しい形のモデルとなることが期待される。そしてこのプロジェクトへの学生の参加は、彼らに貴重な社会活動

の実践研究の場を提供することになり、これにより企画力・実践力にあふれ、そして地域文化活性化の核として活躍しうる能力を有する優れた教師・人材の育成につながるという成果が期待される。

### 1.3 本コーラスワークショップの概要

本企画は、研究プロジェクトの目的に添って上越地域を中心としている久比岐野合唱連盟のメンバー、本学混声合唱団メンバーと話し合いを持ち、立案した。その際、テーマを生涯学習の考えかたに基づき、「楽しいコーラス」とした。そして内容を初心者から中級者までが満足できるようなものとし、具体的には午前3講座、午後3講座の計6講座、そして3人の講師によって行うこととした。以下はその概要である。

A講座（発声指導 初級・混声）（担当：上野正人）

- ・コンコーネ 50 番練習曲（中声用）1 番
- ・早春賦（吉丸一昌作詞、中田章 作曲、中田喜直 編曲）混声3部合唱

B講座（発声指導 中級・女性）（担当：工藤智昭・上越教育大学名誉教授）

- ・女声合唱のための唱歌メドレー「ふるさとの四季」より「故郷」（源田俊一郎 編曲）
- ・野ばら（J.W.ゲーテ 作詞 近藤朔風 訳詞 H.ウェルナー作曲 増田順平 編曲）

C講座（指導者・指揮者講座）（担当：後藤丹・上越教育大学教授）

- ・ひとつの朝（片岡輝 作詞 平吉毅州 作曲）
- ・失われた時への挽歌より「HELP」（吉原幸子 作詞 新実徳英 作曲）

D講座（初級編）（担当：上野正人）

- ・花（武島羽衣 作詞、滝廉太郎 作曲）混声2部
- ・わたしと小鳥とすずと《みすゞとの旅 2部合唱とピアノのための》（金子みすゞ 詩、横山裕美子 作曲）混声2部合唱

E講座（混声合唱）（担当：後藤丹）

- ・朝やけのとき（杉みき子作詞 後藤丹作曲）
- ・Amazing Grace（黒人霊歌 後藤丹 作詞・編曲）

F講座（女声合唱）（担当：工藤智昭）

- ・女声合唱のための唱歌メドレー「ふるさとの四季」より「故郷」（源田俊一郎編曲）
- ・夏の思い出（江間章子 作詞 中田喜直 作曲）

本企画の特徴は、話し合いの中で得られた地域の合唱愛好者のニーズと先述した生涯学習の考え方（文部科学省、1971）に基づき、興味のある人ならば誰でも気軽に参加できるよう作品の演奏だけでなく、発声講座にも初級コースと中級コースを設定したことにある。また、「指導者の育成」という観点から、作曲家による楽曲分析の講座を設定し、理論面からの指導法コースも設定した。

選曲に関しては、これまで全日本合唱連盟などが主催する合唱講習会は、専門性が高く一部愛好者のみを対象とするようなものであるとの感が否めなかったことから（財団法人日本合唱連盟、朝日新聞社、コーラスワークショップ要項）、その点をふまえての選曲を各講師に伝え選曲をお願いした。

また、研究プロジェクトのもう一つの重要な目的「学生に社会教育実践の場を提供する」を達成するために、会場等の準備だけでなく、それぞれのコースにできるだけ均等になるように混声合唱団の学生を配置した。それにより、学生は各講師による指導法を体験しながら、同時に受講者へ音楽面での支援を行えるようにした。

## 2 アンケート結果とその分析

### 2.1 受講者数データ

- ・受講者数：321名（実行委員を除く）、実行委員17名、総参加者338名
- ・各講座の参加者数（申し込み時点での数のみ把握・半日のみの参加者も含まれている）

A講座 180名 B講座 98名 C講座 43名

D講座 57名 E講座 173名 F講座 83名

- ・アンケート総回答者数193名

### 2.2 結果と分析

設問1 お住まいは、どちらですか？

- ・ 上越市内 107 名 (55%)
- ・ 上越市以外の上越地区 69 名 (39%)
- ・ 中越地区 6 名 (3%)
- ・ 下越地区 8 名 (4%)
- ・ その他 0 名 (0%)
- ・ 無回答 3 名 (2%)

今回は新潟県合唱連盟、久比岐野合唱連盟との共催でもあり、全県に案内したが結果は、このように上越市内からの参加者が半数以上を占めた。やはり地理的に下越、中越からの参加は難しいのであろう。上越は開催地区であり、また共催の久比岐野合唱連盟の加盟団体が上越地区を中心にしていることが挙げられる。

設問2 年齢は？

- ・ 10 代 48 名 (25%)
- ・ 20 代 2 名 (1%)
- ・ 30 代 14 名 (7%)
- ・ 40 代 29 名 (15%)
- ・ 50 代 45 名 (24%)
- ・ 60 代以上 47 名 (25%)
- ・ 無回答 6 名 (3%)

10 代は学校単位の参加者。50 代及び 60 代で 49%、20 から 40 代の参加者は 23%。20 から 40 代の参加者が少ない。その理由として単にこの年代に愛好者が少ないと結論づけることは短絡的すぎる。しかしながら、筆者のこれまでの活動の印象から、やはりこの年代の合唱愛好者が少ないことを証明していると考えられることはできる。

設問3 コーラスワークショップについて

①日程（5月の第2日曜日）について

- ・ 良い 145 名 (75%)
- ・ 悪い 39 名 (20%)
- ・ 無回答 9 名 (5%)

75%が良いと答えていることから時期は適当であることが分かる。悪いと答えた主な理由は「連休の最終日である」「田植えの時期と重なる」「母の日である」等が上げられた。

②期間（一日）について

- ・ 良い 172 名 (90%)
- ・ 悪い 6 名 (3%)
- ・ 無回答 14 名 (7%)

期間も 90%が良いと答えている。一方、悪いと答えた主な理由は「期間が短い」「長い」と両方があるため、いまの段階では適当であると考えられる。しかし、これからワークショップの質を上げていく場合には、2 日にわたることも考えてみる必要がある。

③会場（上越教育大学）について

- ・ 良い 184 名 (95%)
- ・ 悪い 2 名 (1%)
- ・ 無回答 7 名 (4%)

会場についても満足している。

④講習の内容について

- ・ 良い 141 名 (74%)
- ・ 普通 41 名 (21%)
- ・ 悪い 2 名 (1%)
- ・ 無回答 8 名 (4%)

74%が「良い」と答えているが、「普通」が21%、「悪い」が1%、合わせて22%を占めたことを重視する必要がある。「良い」と答えた人の自由記述の中で特に多いのは、「発声を丁寧に指導してもらえたこと」「作曲者から直接作品についての指導が受けられたこと」があった。一方、「普通」「悪い」との答えは、その内容からいくつか分類できる。

- 1) 「曲目が多すぎる・時間内でこなせる内容でも良かった」(5名)
- 2) 「思っていた内容と違う」(1名)・「同じ内容であれば講座名を変えたほうが良いと思う」(1名)
- 3) 「ただ歌うだけでつまらない」(2名)
- 4) 「午前と午後の曲の不統一性に不便を感じた」(1名)「午前と午後のコースが別だと大変なので、午前の部を延長しても1日にしたほうが良いのでは」(1名)
- 5) 「新曲は先に楽譜が欲しい」(1名)、「譜読みは事前に済ませたほうが中身が濃くなると思いますがいかがでしょうか。もう少し音楽的内容、今後に生かせる講座内容が欲しい」(1名)、「課題曲を事前に用意しておいて、それについて指導したほうが良いと思います」(1名)、「音が全然分からなかった」(1名)、「しっかり音取りしたかった」(2名)
- 6) 「特に目新しいものというわけではなかった。内容全体には満足しているが「良い」と思うほどではない」(1名)

また、「良い」と答えた回答の中にも「発声指導をもっとして欲しかった」(4名)というものがあつた。これらの回答の原因は講座名と内容のギャップからと考えられる。今後の課題として、講師との事前打ち合わせやニーズ調査の徹底、案内状に記載する講座内容のくふう、詳細化を十分に吟味し準備する必要がある。

#### 設問4 あなたの日常の活動について

##### ①合唱団(クラブ、部)に所属していますか?

- ・ はい 180名(93%)
- ・ いいえ 1名(1%)
- ・ 指導する立場にいる 6名(3%)
- ・ 無回答 6名(3%)

参加者のほとんどがどこかの合唱団に所属し活動していることがわかる。この理由として、合唱がそれ自体集団での活動であること、案内が合唱団宛であつたことがその大きな理由であろう。

##### ②練習内容に満足していますか?

- ・ はい 144名(74%)
- ・ いいえ 28名(15%)
- ・ 無回答 21名(11%)

練習の満足度の点では、「いいえ」の回答が28名で、15%を占めている。その理由として「指導者の力量不足」を上げた人が「いいえ」の回答の大半を占めた。この点から、ワークショップは指導者育成の取り組みも必須であることが明らかとなった。

#### 設問5 大学で開催することについて

今回のワークショップは、合唱連盟と上越教育大学芸術系教育講座(音楽)との共同主催となる初めての取り組みでしたが、この点についてのご感想をお聞かせください

- ・ 良い 103名(53%)
- ・ 悪い 0名(0%)
- ・ 特になし 5名(3%)
- ・ 無し 3名(2%)
- ・ 無回答 82名(42%)

この問いに関しては無回答が42%と多かったが、この地域との連携による取り組みには回答者の半数以上が好意的にとらえていることが分かる。

## 2.3 まとめ

以上、各項目について考察してきたが、このアンケートを通して特に着目すべき点は参加者の普段の練習の満足度とコーラスワークショップに期待する具体的な技術支援が上げられる。まず、設問4の②でも分析したが、



普段の練習に満足できない理由として「指導者の力量不足」を上げている人が「いいえ」の回答の大半を占めた。また、設問3の④で分析した講習内容の満足度では、「はい」「いいえ」共に発声指導についての答えであった。これら2点から、受講者は普段の練習で発声という基本技術の習得を常に求めていること、そのために十分な指導を行える指導者を求めていることが明らかとなった。今後の課題として、音楽的な内容の指導だけではなく具体的な発声法を中心とした歌唱技術指導を行える人材を育成することが重要課題であることが明らかである。また、本論では自由記述のすべてを記載してはいないが、本コーラスワークショップで特に満足した点として、普段一緒に歌うことのない趣味を同じくしている人たちや学生と共に歌えたことの喜びも多く寄せられていた。この点も研究プロジェクトの「地域貢献」と「学生支援」の融合に深く関わる重要なポイントとしてあげることが出来る。

### 3 検証

#### 3.1 地域貢献

これまでのような大学からの一方通行的な支援・貢献ではなく、外部団体との協働、すなわち外部団体からの予算・人的財産の取り込みと大学の人的・知的・物質的財産の提供による互いの財産の相互・共同利用により、地域活性化のための企画を共同で運営するという点についてその目的の多くは達成されたと考える。

具体的には、公開講座のような大学側からの一方向的な企画の提供ではなく、地域のニーズをしっかりとらえた講座を開設するために、久比岐野合唱連盟メンバー、本学混声合唱団メンバーと話し合いを持ち、企画を進めたことがあげられる。そしてその中で、地域貢献ということで大学側からは、人的、物質的財産の提供、すなわち人的とは講師に本学教員を充てたこと、会場設営、受講者の誘導、演奏支援で本学混声合唱団メンバーを充てたこと、物的とは会場に本学施設を提供したことが挙げられる。一方、外部団体の提供は、連盟の持つネットワークを使った講習会の宣伝、楽譜の準備、プログラムの作成、受付などの人的なもの等が挙げられる。これらのことは先に挙げた、大学からの一方的な提供ではなく、地域団体との会合の中で地域のニーズを探り、それに合わせて実のある内容の設定が可能となったこと、また、案内、楽譜の準備、プログラムの印刷など金銭的なものは外部団体の予算を用いたこと。これらは互いの財産の相互・共同利用という目標にかなった実質的なものとなったと評価する。

#### 3.2 学生支援

もう一つの目的として、同時にこうした地域との連携した活動の中で、社会教育活動の実践研究の場として学生に場を提供するという新しい「地域貢献」「学生支援」の形を創出する点にあった。実際に企画段階から学生が加わってのミーティングは数度開かれた。その中で学生がどのような形で講習会を支援できるのかが話し合われ、最終的には、会場案内、設営等を分担で行うと共に、各分科会に均等に分かれ、講習参加者とともに歌う事により音取り等の技術的な支援をする事となった。この点についてアンケートの中では学生の親切な態度とともに、「若い声とともに演奏でき嬉しかった」等、普段交流できない世代とともに演奏する新鮮さとその喜びとが寄せられた。このような交流を通して、参加学生は社会教育の重要性と喜び、そして教育機関という専門に携わる者の地域における役割の重要性を実践とともに体感できたのではないかと考える。

しかし、その一方で、学生の支援が側面的なものになってしまい、具体的な内容の提案や実際に指導にあたるなど積極的にワークショップの前面に出る機会が少なかったことは今後の反省点として残る。実践研究の場として、より積極的に実践的な指導法を学ぶためにはやはりどのような形であれ指導の機会を持つこと、学生に具体的な提案を促し、講座を任せるなどといった前面で活躍する事がなによりも重要であると考えからである。その点が今後の課題として考えるべき点である。

### 4 今後の展望

本学と地域合唱連盟との共催による本コーラスワークショップは300名を越える受講者を集める事ができ成功であった。それはアンケート結果にもある通り、ほとんどの受講者が満足しており、また自由記述からもそのことが十分に窺える。しかしながら、運営面などで課題が残ったことも事実である。第1点目には、コーラスワークショップ要項には各コースの内容が十分に記載されておらず、そのため受講者の中には期待したものと大きく違っていたという感想が寄せられた事が挙げられる。第2に、昼食時の学生食堂でのメニュートラブルが上げられる。この点についても運営委員でしっかりと食堂側と打ち合わせる必要があった。第3には、3.2で上げた学

生の参画の仕方である。本コーラスワークショップは、地域と大学の協働による社会教育の場の提供と学生の参加による実践の場の提供にあった。この点について、学生には会場準備や案内といった側面からだけでなく、各講座に参加することによって指導法を学び同時に参加者への音楽面でのサポートにあたることを期待した。結果としては、先述したとおり一般の受講者との交流などプラス面も多かったが、その一方では側面的なサポートに従事してしまった者も多かったと感じている。今後は、一人一人の学生がそれぞれの力量の中で積極的に指導面などの実践面に参画できるよう、十分に話あうことでその可能性を探る必要があると考える。

以上、本研究をふまえて今後の展望を述べてきたが、やはりこうした地域との連携した活動の中で、社会教育活動の実践研究の場として学生に場を提供するという新しい「地域貢献」「学生支援」の形を創出するためには、このような地域と一体となった活動を継続して行うことが必要であると考えている。そうした継続性こそが、一つ一つの課題を克服する力となると同時に、大学、地域、学生の3者の連携による学校教育と社会教育が一体となった活動が創出されるものと考えている。

#### 【参考資料】

- ・ (財) 全日本合唱連盟及び朝日新聞社主催による第7回から第9回、第11回および第14回から第16回までのコーラスワークショップ要項
- ・ 田辺正行. (2006. 7. 10) 合唱連盟の加盟団体と財政状況. ハーモニー夏号 137 (第36巻137号). 社団法人日本合唱連盟. 44-45
- ・ 文部科学省. 生涯教育について (答申) (第26回答申 (昭和56年6月22日)) ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/12/chuuou/toushin/810601.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/810601.htm)). 2006. 9. 25 取得